

いきもの ふれあいの森 通信

2025.2.5 第2号



●暖冬

アルプス公園やその周辺から眺める冬の北アルプスは松本平を代表する景観でもあります。中でも標高 2857m の常念岳はその象徴的な存在です。写真は 1 月 16 日に撮影したのですが、稜線の積雪が少なく前山は黒々としていて、この時季の景色とは思えません。アルプス公園も 1 月 23 日現在雪はなく、日中気温が上がって春めいた日が続いています。古民家体験施設近くに自生するニワトコが早くも芽吹いていました。



●ウバユリ

養老坂付近にはウバユリのまばらな群落があります。茎の長さが 1m を超えるものもあり、冬枯れしてもしっかりと立っているものがほとんどです。先端の蒴果(さくか)は部屋が 3 つに仕切られ、薄い皮膜(翼)を持った種子がまるで菓子の「チップスター」のように重なって格納されています。強い風が吹くと、この種子が紙吹雪のように飛ぶ様子を見ることがあります。積雪の多い年は雪の重みで茎が折れてしまうことがありますが、倒れた先に種子がこぼれ落ちるので、身に着けた「高さ」は生かされるのです。



●オオムラサキの越冬幼虫

オオムラサキは国内最大のタテハチョウで、オスは紫色の美しい翅を持っています。日本の「国蝶」にも選定(1957 日本昆虫学会)されている我国を代表するチョウのひとつです。アルプス公園はこのオオムラサキのメッカとして知られています。園内に食樹となるエノキ(ニレ科)、エゾエノキが多く自生することが、オオムラサキの生息を支えてきました。以前は園内の1本のクヌギの樹液に20匹ものオオムラサキが群れる光景が目撃されました。古民家体験施設や森の里広場の周辺はオオムラサキが集まる場所で、古民家の中に紛れ込むこともしばしばでした。

この時季、エノキの根元に積もった枯葉を丁寧にめくっていくと越冬幼虫が見つかります。正面顔がとても愛らしい幼虫です。オオムラサキの幼虫の背中突起は4対ですが、近縁のゴマダラチョウの幼虫は3対なので判別は容易です。ただ、最近園内で増えている外来種のアカボシゴマダラは4対でオオムラサキによく似ていますが、前から3番目の突起がひと際大きいので間違えることはないでしょう。



オムラサキの越冬幼虫(1月7日)と
以前のオオムラサキの集団(下:2011)



アカボシゴマダラ越冬幼虫
森の入口広場付近(2023)

ここ数年、このオオムラサキが極端に数を減らしています。原因は生息環境の森林化や温暖化などが複合的に影響を与えていると考えられますが、はっきりしないところもあります。観察が終わった幼虫は元の場所に静かに戻してあげましょう。

コラム～公園へのアカボシゴマダラの侵入～

神奈川県でアカボシゴマダラが記録されたのは27年前。中国大陸産の個体を人為的に放したものとみられています。その後関東一円から信州へと分布を広げ、松本平でも5年ほど前からその姿が見られるようになりました。食樹のエノキが多い東山山麓沿いに急速に生息域を広げています。アカボシゴマダラは国の特定外来生物に指定されていますが、その背景には同じ環境に暮らすオオムラサキやゴマダラチョウとの競合が懸念されているからです。松本平ではアルプス公園の目撃例が最も多いようです。今後公園内のアカボシゴマダラの動向を調べていく必要があるでしょう。

年2回発生しますが、5月に出現するものは赤い斑紋が消えて全体的に白っぽく、まるで別種のようなです(円内)。なお、法令で生体の移動などが制限されていますので注意が必要です。

(アルプス公園自然活用委員会 那須野 雅好)



アカボシゴマダラ
城山公園(2022)